

# 色彩選好と意識的性格としてのBigFiveの関係性

## The relationship between color preference and Big-Five as conscious personality

林 智 幸

### 問題

**色と性格の関係** 幾つかの簡単な質問に対する回答だけで、回答者の心理的特性を当てるといふ心理ゲーム(しばしば「心理テスト」と称されるが、標準化などの問題から心理学者からすればゲームに過ぎない)は依然として人気がある。このような心理ゲームの1つに、好きな色(以下、色彩選好)から性格を当てるといふものがある。

例えば、野村(2005)によると、最も好まれる色である赤色と青色が好きな人の心理的特性は次の通りである。赤色を好む人は、「関心事に対して内向せず、敢然と向かっていく。事業欲も盛んだ。男性も女性も衝動的で運動家タイプ。性的魅力にあふれ、思ったことは良くも悪くも、すぐ口をついて出る」、青色を好む人は、「不屈であるが、悪くいうと独善的である。いつも自分の考えは正しいと思っている。ときには、自分の目的や根拠をごまかす。青色好きの人は必ずしも率先者ではないが、グループに参加したがらる」と記述される。このように、単なる色彩選好の情報から、多面的な心理的特性の情報を引き出せるという考えが、日常生活において広まっている。しかし、楽しむためにこのような色彩選好と性格との関係性に言及するのはともかくとして、この関係性は心理学的に実証された「正しい」ものなのだろうか。

色と心理的特性の関係を検討する心理学的研究は多数行われており、色彩心理学という分野も存在する。それらの研究の中で、色彩選好と性格との関係性は投影法を用いた性格検査などで検討されている。例えば、代表的な投影法であるRorschach検査においては、色彩反応は外的環境の情緒的刺激に対する反応性の程度を示し、運動反応との比較により色彩反応が多い場合には外向的性格の可能性が高いと解釈することになっている(村上・村上, 1988)。また色・形分類検査において、色彩反応が多い大人は、幼児っぽく衝動的で、自己中心的な性格と解釈される(千々岩, 2001)。

**色彩象徴検査** このように、投影法においては、色反応と感情または性格との間に一定の関係があるという立場を採用した解釈が行われているが、より直接的に両者の関係性を利用した投影法として松岡(1995)の色彩象徴検査が挙げられる。この検査は、受検者に対して、一定の言葉を提示して、人々の間に共通のイメージを喚起させ、喚起されたイメージを色で表現させ、その色を通して、人々のイメージ世界を探ろうとする(色彩象徴検査が実際に何を調べようとしているかの検討は後述)。具体的には、恐怖、恨み、などの41の抽象語を提示して、予め用意された16色のどの色が

イメージに近いかを選択させる。回答を集計して、何度も選択された色が、その人の持つイメージ世界を典型的に示しているとして、色が内在しているイメージをその人の性格特徴に投影することになる。例えば、赤を多く選択した人の場合、赤が内在するイメージである「活発さ（活動性）」と「力強さ（力量性）」を性格特徴として有していると解釈される。

色彩象徴検査では、予め、SD法により16色の共通イメージが測定されている。SD (Semantic Differential) 法はOsgoodによって考案された、概念の意味を調べる測定法であるが、主に感性的／感情的意味を測定するとされる。Osgoodによると、どんな対象であっても、主要な3つの意味次元によって測定可能であると主張する。すなわち、(1) 評価性 (evaluation) : 自分にとってそれは快いものか、不快なものか、受け入れられるものか、拒否すべきものか、(2) 活動性 (activity) : インパクトの強さや躍動感、スピーディか鈍重か、喧騒か物静かか、(3) 力量性 (potency) : たくましか弱々しいか、ずっしりとしているか軽つばいか、である。

色彩象徴検査で扱われる16色が3次元別でどのような意味（イメージ）を持つか、その詳細は松岡（1995）などに記されているが、最も強い意味次元のみに注目するならば次のような結果となる。男性の場合、(1) 青、暗褐、黄緑、緑、赤紫、青緑、赤紫濁は評価性が強く、(2) 黄、白、赤、灰、橙は活動性が強く、(3) 黒、ピンク、青紫、紫は力量性が強い。女性の場合、(1) 白、黄緑、赤紫は評価性が強く、(2) 青、黄、赤、青紫、灰、橙は活動性が強く、(3) 暗褐、黒、緑、ピンク、青緑、赤紫濁、紫は力量性が強い。

**意識的性格としてのBigFive性格** 松岡(1995)によると、色彩象徴検査が対象とする人々のイメージ世界とは性格の中核であるとされる。例えば、母親から否定され続けてきた人は、自分自身を無価値な人間であると思い、自己や世界に対するイメージを、暗く、卑屈なものとする。否定的なイメージを持つ人は、仮に、明日から未知の外国へ旅立とうとする時、暗く苦難にうち満ちた旅をイメージしてしまい、旅先であまり活動的とはならないだろう。このように、内面のイメージ世界がその人々の行動をリードしていると主張する。また、他人から期待されている己の役割を演ずるためにかぶった仮面としての性格、その仮面の下に隠されている素顔としての性格、ある種の行動に駆りたてる無意識の性格と、人の性格を3側面に分けている。内的イメージ世界とは無意識的性格を捉えていると考えられよう。

色彩象徴検査に限らず、投影法は全般的に、無意識的な性格側面を対象とする(加藤・中里, 1989)。対して、現在の性格研究で主に検討されているのは意識的な性格側面であり、これは質問紙法によって調べられる。さて、包括的に性格を質問紙法で捉えようとする場合、現在ではBigFive論に基づく性格検査が使われることが多い。BigFive論とは、人の性格の特徴は主要な5特性によって説明可能であるという考え方であり、性格理解の共通言語と期待されている(辻, 1998)。

BigFive論は特定の研究者が提唱したのではなく、数多くの研究者から提案・賛同されている性格理論である。もともとBigFive論は、性格語彙研究と性格質問紙研究の2つの流れから誕生した(村上・村上, 1999; 辻, 1998)。前者は性格形容詞などの性格を記述した言葉の分類を行うアプローチであり、後者は人格理論に基づく質問紙の作成を目的とするアプローチである。いずれもAllport

& Odbert (1936) の研究が発端となり、それが1990年代になり合流し確固としたBigFive説が誕生することとなった。

語彙研究においては、Allport & Odbert (1936) の性格表現語を収集したリストを作成し、Norman (1963) が改訂を行う中で高潮性、協調性、誠実性、情緒安定性、教養の5特性を発見した。Mischel (1968) の性格特性批判によりBigFive研究が一時期停滞するものの、その後、Peabody & Goldberg (1989) が語彙研究の中から、権力、愛情、仕事、情緒、知性の5特性を抽出している。

質問紙研究においては、Allport & Odbertのリストを参考にCattell (1943) が独自の多因子人格理論にもとづき作成した性格質問紙16PFが発端となる。この16PFを批判する形で、Tupes & Christal (1961) が、高潮性、協調性、信頼性、情緒安定性、文化の5特性を見出した。Mischelの批判後ではDigman & Takemoto-Chork (1981) もCattellの特性用語分析の総括の中で、外向性、協調性、良心性、神経症傾向、経験への開放性の5特性の抽出を行った。

1990年代に2つのアプローチが合流して、BigFive論に基づく性格検査が開発されるようになり、例えば、Costa & McCrae (1992) のNEO-PI-R、辻 (1998) のFFPQ、村上・村上 (1999) の主要5因子性格検査が挙げられる。このように現在ではBigFive論は多くの研究者から賛同を得るようになった。5特性の具体的な名称については研究者によって若干異なるが、その内容は本質的に同じである。本研究では、活動を本質とする「外向性」、関係を本質とする「愛着性」、意志を本質とする「統制性」、感情を本質とする「情動性」、知性を本質とする「開放性」の名称を採用する。

**本研究の目的** 人々の色彩選好と、投影法が対象とする無意識的性格の間に関係性が指摘されているが、質問紙法によって測定される意識的性格との間に関係性についての実証的報告がされていない。本研究では意識的性格としてBigFive論を採用するが、BigFive性格の概念検討を行い、その後、色彩選好との関係性を検討する。

## 研究1

### 目的

色彩選好とBigFive性格との関係性を検討する前にBigFive性格概念の精緻化を行う。野村(2005)は、どのような色彩を選好する者は、どのような内面イメージを持つか、どのような人付き合いをするかを記述している。そこで、内面イメージの中でも重要な、自己の肯定的イメージを意味する自尊心／自尊心と、人付き合いの技能である社会的スキルが、BigFive性格とどのような関係があるのかを検討する。

### 方法

**調査協力者と実施方法** 静岡市内の女子大学生に対して、授業中に一斉に多数の調査質問紙(研究1～研究3で使用した質問紙全て)を配付、実施、回収を行った。調査は88名に対して行ったが、研究データとしての提供承諾に同意が得られ、かつ、記入漏れのない有効回答者数は84名、平均年齢18.29歳(標準偏差0.59歳)であった。

**自尊感情尺度** 山本・松井・山成 (1982) によって開発された、人が自分自身についてどのよ  
うに感じるのかという感じ方を測定する尺度である。「自尊感情=成功/願望」と定義したJamesに  
よって自尊感情/自尊心の実証的研究が始まったが、Rosenbergは、他者との比較により生じる優越  
感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度としての自尊感情を捉え、またそ  
の尺度化に成功した。山本ら (1982) の尺度はRosenbergの尺度を邦訳したものであり、単一の自尊  
感情得点が算出される。

**Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版)** 菊池 (2007) によって開発された、「対  
人関係を円滑に運ぶために役立つスキル (技能)」と定義される総合的な社会的スキルの高低を測定  
する。全部で18項目で構成され、単一の社会スキル得点が算出される。

### 結果と考察

BigFive得点と自尊感情得点あるいは社会的スキル得点に対して有意水準5%における相関分析を  
行った。自尊感情は、外向性 ( $r=0.27$ )、開放性 ( $r=0.54$ ) との間に有意な正の相関関係が、情動性  
( $r=-0.31$ ) との間に有意な負の相関関係が見られたが、愛着性 ( $r=-0.15$ )、統制性 ( $r=0.14$ ) の間  
には有意な相関関係は見られなかった。社会的スキルは、外向性 ( $r=0.52$ )、愛着性 ( $r=0.24$ )、統制  
性 ( $r=0.36$ )、開放性 ( $r=0.55$ ) との間に有意な正の相関関係が見られたが、情動性との間に有意な  
相関関係は見られなかった ( $r=-0.16$ )。なお、社会的スキルと自尊感情との間に有意な正の相関関係  
が見られた ( $r=0.37$ )。

自尊感情は、外向性、情動性 (の低さ)、開放性と関係があるが、杉浦・丹野 (2008) によると、  
外向性はポジティブ情動傾向と、情動性はネガティブ情動傾向と、開放性は心理療法に対する効果  
的反応傾向と関係がある。つまり、自尊感情とは、喜び・楽しみなどの肯定的感情に強く反応し、  
逆に怒り・哀しみなどの否定的感情にあまり反応することない、心理的な健康状態と解釈できる。

社会的スキルは、外向性、愛着性、統制性、開放性と関係がある。肯定的な対人関係に貢献する  
人付き合い技法としての社会スキルを発揮するには、スキルを発揮しようとする積極性 (外向性)、  
他者との関係構築を望む態度 (愛着性)、自己を抑えて他者や集団を判断基準にする態度 (統制性)、  
新しい関係構築を楽しむ態度 (開放性) が必要になると解釈できる。

## 研究2

### 目的

意識的性格としてのBigFive性格と、色彩選好との間に関係があるかを調べる。色彩象徴検査にお  
いては最終的に1色 (あるいは少数) を典型的に選好する色彩として抽出しているが、好きな色を  
1色に絞り込むのは困難だと思われる。そこで、いろいろな色に対して選好度を5段階で評定して  
もらい、色彩選好と受検者のBigFive性格との関係性を検討する。

### 方法

**調査協力者と実施方法** 研究1と同じ協力者、実施方法である。

**主要 5 因子性格検査** 村上・村上 (1999) により開発されたBigFive論に基づく質問紙性格検査。全部で70項目から構成されており、受検者の受験態度を調べるとともに、12項目ずつの質問により、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性を測定できる。なお、本研究においては、BigFiveを外向性、愛着性、統制性、情動性、開放性とする概念として検討を進めた。

**色彩選好対象の16色** 色彩象徴検査において使用されている16色を採用した。具体的には、白、ピンク、黒、灰、青、暗褐色、赤紫、紫、赤、青緑、橙、黄緑、青紫、黄、赤紫濁、緑に対して選好度を5段階で評定させた。

### 結果と考察

主要 5 因子性格検査の結果を集計しBigFive性格得点を求めた。BigFive性格得点と16色に対する選好得点との間の相関分析を行い、その結果を表1に示した。分析の結果、外向性とピンク ( $r=0.32$ )、外向性と黒 ( $r=0.28$ )、愛着性と青緑 ( $r=-0.24$ ) についてのみ有意な相関係数が得られたが、全体的には、色彩選好とBigFive性格との間に相関は見られなかった。また、社会的スキルと自尊感情との間にも色彩選好との相関は見られなかった。

表1 色彩選好と、BigFive性格・自尊感情・社会的スキルとの相関係数

	白	ピンク	黒	灰	青	暗褐色	赤紫	紫
外向性	0.04	<u>0.32</u>	<u>0.28</u>	0.14	-0.09	0.17	0.16	0.11
愛着性	0.15	0.10	0.05	-0.02	-0.11	-0.12	-0.09	0.04
統制性	-0.11	-0.13	-0.17	-0.10	0.03	-0.11	0.00	0.08
情動性	0.02	-0.03	0.12	0.07	-0.05	0.04	0.03	-0.03
開放性	-0.12	-0.04	0.02	0.00	0.09	0.01	-0.01	0.02
自尊感情	-0.19	0.15	-0.15	-0.01	0.01	-0.04	0.17	0.00
社会的スキル	0.03	0.16	0.13	0.10	0.09	0.11	0.04	-0.03
	赤	青緑	橙	黄緑	青紫	黄	赤紫濁	緑
外向性	0.18	0.07	-0.14	-0.15	0.05	-0.08	0.12	-0.05
愛着性	0.01	<u>-0.24</u>	0.12	0.11	-0.07	0.10	-0.06	0.11
統制性	0.09	0.03	0.13	0.11	-0.01	0.04	-0.05	0.15
情動性	-0.09	-0.16	-0.03	-0.05	0.09	-0.03	-0.05	-0.09
開放性	0.06	0.06	-0.07	0.00	-0.10	0.00	-0.07	0.05
自尊感情	-0.02	0.17	0.02	0.09	-0.08	0.07	-0.06	0.02
社会的スキル	0.18	0.04	0.06	-0.01	-0.04	-0.09	-0.03	0.14

※下線を引いた数値は、有意水準 5 %において有意な相関係数を意味する

わずかに有意な相関関係が見られた3色を選好する人の特徴は、野村 (2005) によると次のように記述されている。ピンクを好む人は、「ディレクタント (好事家, しろうと評論家) 的な性格を持っている」、「人から守られたり特別の待遇をしてもらいたがる」など愛情を求める。黒を好む人は、「人を動かす才覚もあり力強いが、やや明るさと率直さに欠ける」、「権威あるイメージ、他人に有無を言わせぬイメージを与えよう」と支配的である。青緑を好む人は、2種類のタイプに分かれ、

1つは「自己充足的エネルギーの持ち主」,「楽天的で信仰心にあつく,人を信じやすい」というタイプであり,他方は「平気で魅力的な人物である」,「感性豊かで洗練されている」というタイプである。

これらの記述は内面イメージだけではなく,どのような色彩を好む人物はどのような表出的行動を行っているかまで言及をしている。しかし表出行動に現れるためには意識化が必要であるが,色彩選好とBigFiveによる意識化された性格(意識的性格)との間には,上記の記述を支持する関係性は見られないと言える。結論として,色彩選好と意識的性格との間には関係はない。

### 研究3

#### 目的

人が色彩選好と性格の関係に興味を持つ理由の1つに「簡単に心について知ることができる(少なくともそのような気分になれる)」ことが挙げられる。しかし研究2から,色彩選好による意識的性格の診断は困難であることが分かった。そこで,1つ2つの質問により性格を当てるのは無理だとしても,限りなく少数の質問項目により性格診断が可能な尺度を開発することにより,そのようなニーズを持つ人々に対応できると考えられる。そこで,研究2で用いた主要5因子性格検査の質問項目を選び出した「短縮版主要5因子性格検査」の試作を目的とした。

#### 方法

**質問項目の選出法** 主要5因子性格検査から質問項目を選出する。その際,質問文の長さが適度である,各特性に対して4項目(そのうち逆転項目が2項目)ずつ,質問項目に各性格特性が連想しやすい,などの条件を設定して,全20項目版とした。具体的な質問項目を表2に示す。

表2 短縮版主要5因子性格検査(試作版)の質問項目

特性	短縮版項目:【*】は逆転項目
外向性	他の人と比べると話し好きです/どちらかというと,にぎやかな性格です/人前で話すのは苦手です【*】/どちらかというと地味でめだたない方です【*】
愛着性	誰にでも親切にするように心がけています/思いやりがある方です/親しい仲間でも,本当に信用することはできません【*】/人から親切にされると,何か下心がありそうで警戒しがちです【*】
統制性	どちらかというと徹底的にする方です/仕事や勉強には精力的に取り組みます/問題を綿密に検討しないで,実行に移すことが多い【*】/どちらかというと怠惰な方です【*】
情動性	自分で悩む必要のないことまで心配してしまうのは確かです/どうでもいいことを,気に病む傾向があります/他の人と同様に,神経質ではないと信じていま【*】/あまり心配性ではありません【*】
開放性	将来のことを見通すことができる方です/いろいろな分野の言葉をたくさん知っています/難しい問題にぶつかると,頭が混乱する方です【*】/問題を分析するのは苦手な方です【*】

**短縮版の妥当性検討** 研究2で収集したデータを利用して20項目の短縮版検査の妥当性を検討した。具体的には,正式版のBigFive性格得点と短縮版のBigFive得点を求め,得点間の相関分析を行った。

## 結果と考察

表 3 正式版BigFive合計点の因子間の相関係数

	正式版 外向性	正式版 愛着性	正式版 統制性	正式版 情動性	正式版 開放性
正式版外向性	1.00	0.23	0.00	-0.04	0.18
正式版愛着性		1.00	0.16	0.08	-0.04
正式版統制性			1.00	0.01	0.39
正式版情動性				1.00	-0.30
正式版開放性					1.00

まずは、オリジナルの正式版において、それぞれのBigFive性格得点の相関分析を行った結果を表3に示す。それぞれのBigFive性格は独立関係（互いに関係なし）とされるため、各性格得点の間には無相関であることが期待される。分析の結果、多くの特性間関係は無相関であるが、外向性と愛着性 ( $r=0.23$ )、統制性と開放性 ( $r=0.39$ )、情動性と開放性 ( $r=-0.30$ ) については有意な相関係数が見られた。正式版検査に見られたこの関係性は、調査対象者特有の特徴であると考えられ、正式版検査を元に作成された短縮版検査においても確認されると予想される。

表 4 短縮版と正式版のBigFive合計点の相関係数

	正式版 外向性	正式版 愛着性	正式版 統制性	正式版 情動性	正式版 開放性
短縮版外向性	0.94	0.18	-0.04	-0.04	0.12
短縮版愛着性	0.06	0.78	0.05	0.02	-0.14
短縮版統制性	-0.01	0.11	0.84	0.12	0.30
短縮版情動性	0.06	0.15	0.10	0.85	-0.24
短縮版開放性	0.07	-0.01	0.43	-0.31	0.80

続いて正式版と短縮版のBigFive得点の相関分析結果をを表4に示す。短縮版検査の妥当性が高いのであれば、同じ性格における正式版検査と短縮版検査との相関係数は高く、異なる性格における両者の相関係数は低くなるはずである。実際、外向性 ( $r=0.94$ )、愛着性 ( $r=0.78$ )、統制性 ( $r=0.84$ )、情動性 ( $r=0.85$ )、開放性 ( $r=0.80$ ) における正式版と短縮版の相関係数は高い。また、正式版開放性と短縮版統制性 ( $r=0.30$ )、正式版開放性と短縮版情動性 ( $r=-0.24$ )、正式版統制性と短縮版開放性 ( $r=0.43$ )、正式版情動性と短縮版開放性 ( $r=-0.31$ ) においては有意な相関関係が見られた。しかし、この相関関係は短縮版検査の基礎と成った正式版検査データにおいても報告されており、この相関関係は本研究の調査協力者データ特有の現象と考えられる。よって、短縮版検査はある程度の妥当性を持つと判断される。

## 総合考察

本研究は、意識的性格としてのBigFive性格と、自尊感情、社会的スキル、色彩選好との間の関係性を検討することを目的とした。分析の結果、BigFive性格は、非常に内面的な心理的特性である自尊感情と、対人関係面に現れる表層的特性である社会的スキルと、両者との間に各々の関係性が見られたのだが、色彩選好との間には関係性は見られなかった（研究1と研究2）。

しかし、本研究の結果から直ちに色彩選好と性格とは無関係にあり、先行研究は間違いであると判断するのは早計である。宮城（1960）が性格を「気質・体質」「（狭義の）性格・人格」「習慣的性格・態度」「役割性格」としての層構造を指摘したように、性格には深層的－表層的というレベルを導入して考慮すると、性格と関係があると主張する投影法を用いた先行研究結果と、性格と関係がないと結論を下す質問紙法を用いた本研究の結果は矛盾しない。加藤・中里（1989）によると、投影法は無意識的心理特性を測定し、質問紙法は意識的心理特性を測定する。すなわち、色彩選好は、深層的なイメージ連想傾向としての無意識的性格とは関係が見られるが、表層として現れる実際の思考・行動パターンとしての意識的性格とは関係がないという結論が最も妥当であろう。

また、色彩選好と関係が見られなかった自尊感情と社会的スキルは、BigFive性格特性との関係は見られた。自己を肯定的に捉える自尊感情と、対人関係を円滑にする技能である社会的スキルを高いレベルで持つことは、社会的に良いこととされる。つまり自尊感情と社会的スキルと正の相関が見られる性格特性も同様に、その特性が高いことが社会的に良いとみなされることになる。性格自体に本質的に良い／悪い性格というものはないが、社会的に望ましい／望ましくない性格というものは存在し、社会的に望ましい性格とは、高い外向性、高い愛着性、高い統制性、低い情動性、高い開放性が相当することになる。これらの性格特性が望ましい性格であるということは、性格評定用語を調べた青木（1971）によっても確認される。すなわち、高い外向性を意味する「ファイトのある」、高い愛着性を意味する「親切」「優しい」「朗らか」「明るい」「寛大な」、高い統制性を意味する「頑張る」「責任感ある」「努力する」「粘り強い」「責任を取る」「一生懸命になる」、低い情動性を意味する「落ち着いた」が好まれる性格評定語の上位語として報告されている。

さらに短縮版主要5因子性格検査の試作を行った（研究3）。そもそも色彩選好から性格を知りたいと望む人たちは、簡易な手続きで性格を知る手段を望み、その手段の1つとして色彩選好による性格診断を使っていると予想される。本研究において試作された妥当性の高い性格検査を提供することで、この望みに答えることができる。また、性格検査の学習を行う者にとっても、正式版の質問構造を崩すことなく作成された試作版検査は、BigFive性格検査そのものを理解するための素材として活用することもできる。

最後にBigFive論と投影法との関係について論じる。BigFive論は、色々な批判はあるものの、性格理解のための共通言語として活用されている。本研究では色彩選好との関係性を検討することで、質問紙法により測定されたBigFive性格が、イメージ連想などの内面的性格との間に関係がないことが分かった。この結果は、質問紙法によって測定された性格像と、投影法によって測定される性格

像との間にズレが存在することを示唆する。つまり、(BigFive論そのものではなく) 主要5因子性格検査によってある人が外向性と測定されたとしても、投影法で同じように外向性と診断されるには限らないことになる。無論、このズレは質問紙法が意識的性格を、投影法は無意識的性格を測定していることから説明できるのであって、BigFive論そのものが投影法と適合しないわけではない。

これまでのBigFive性格は質問紙法によって測定されていたが、BigFive論が本当に性格理解の共通言語であるならば、投影法の性格理解においてもBigFive論が適用できるはずである。例えば、Rorschach検査などの投影法の解釈についてもBigFive論を適用するならばどのようなようになるか。Rorschach検査において色々な反応得点が算出され、その反応得点に基づき解釈がなされる(村上・村上, 1988)。人間運動反応が多い被検者は「衝動を抑制」したり、あるいは「内向型」の体験が多かったりする。また、動物運動反応が多い場合は「未分化で幼児的な衝動」に身を任せたり、色彩反応が多い場合は「外拡型(外向型)」の体験が多かったりする。さらには、色々な形態反応の中でも、形態材質反応や形態拡散反応の割合が多い場合には、過度の「愛情欲求と依存欲求」を持つとされる。これらは、上記の得点が高い者は、内面レベルにおいて、情動性、内向性や外向性、愛着性などの性格特性を持っていると、BigFive論的に翻訳することができるだろう。

このように、意識的/無意識レベルという区分を導入することにより、性格研究は広がりを見せるようになる。その結果として、性格研究の共通言語とされるBigFive論についてもより精緻な検討が行われるだろう。

## 引用文献

- Allport, G. W. & Odbert, H. S. 1936 Trait names: A psychological study. *Psychological Monographs*, 47 (1, Whole No. 211.)
- 青木考悦 1971 性格表現用語の心理辞典的研究—455語の選択, 分類, および望ましきの評定—*心理学研究*, 42, 1-13.
- Cattell, R. B. 1943 The description of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 38, 476-506.
- 千々岩英彰 2001 色彩学概説 東京大学出版会.
- Costa, P. T. Jr., & McCrae, R. R. 1992 *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual*. Odessa, Florida: Psychological Assessment Resources.
- Digman, J. M. 1989 Five robust trait dimensions: Development, stability and utility. *Journal of Personality*, 57, 195-214.
- 加藤義明・中里至正(編) 1989 入門人格心理学 八千代出版株式会社.
- 菊池章夫(編) 2007 社会的スキルを測る: KiSS-18ハンドブック 川島書店.
- 松岡武 1995 決定版 色彩とパーソナリティー 色でさぐるイメージの世界 金子書房.

- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. New York: John Wiley & Sons.
- 宮城音弥 1960 性格 岩波書店
- 村上宣寛・村上千恵子 1988 などときロールシャッハ ロールシャッハ・システムの案内と展望  
学芸図書.
- 村上宣寛・村上千恵子 1999 性格は五次元だった ―性格心理学入門― 培風館.
- 野村順一 2005 色の秘密 最新色彩心理学 文春文庫.
- Norman, W.T. 1963 Toward and adequate of personality attributes : Replicated factor  
structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*,  
66, 574-583.
- Peabody, D., & Goldberg, L. R. 1989 Some determinants of factor structures from  
personality-trait descriptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 552-567.
- 杉浦義典・丹野義彦 2008 パーソナリティと臨床の心理学―次元モデルによる統合 培風館
- 辻平次郎 (編) 1998 5因子性格検査の理論と実践 こころをはかる5つのものさし 北大路書  
房
- Tupes, E. C. & Cristal, R. E. 1961 *Recurrent personality factors based on trait ratings* (USAF ASD  
Technical Report, No.61-97) . Lackland Air Force Base, Tex. : U. S. Air Force. (reprinted  
in *Journal of Personality*, 1992, 60, 225-251.)
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30,  
64-68.